

「ものさし」のいない世界

ここに『子どもたちよ、ありがとう』と題した一冊の本があります。

著者の平野恵子さんは、高山市にある浄土真宗のお寺の坊守さん（住職の妻）でしたが、平成元年、腎臓ガンのため41歳で亡くなりました。

本書は、病床の中から我が子に、仏さまの教えに出遭えたことの喜びを書き綴った手記です。

平野さんは三人のお子さんに恵まれましたが、長男（素行ちゃん）は、親の手に負えないほどの腕白な子で、二人目の子（由紀乃ちゃん）は、脳性小児麻痺による重度の障害を持った子供さんでした。

若い頃、平野さんはそんな子供を持ったことに深い絶望感を抱き、いっそのこと子供を殺し自分も死のうとまで思いつめていたそうです。

ところが、ある日のこと、いつものように元気に遊んで帰って来た長男が、身動き一つ出来ない妹を抱きしめて、「お母さん、由紀乃ちゃんはきれいだね。顔も、手も、足も、お腹だって全部きれいだよ。由紀乃ちゃんはお家のみんなの宝物だもんね」と、こう言ったのです。

その一言が、平野さんの心の目を開かせたのです。

人間の持っている価値観は、時にはどんな恐ろしいことでもあります。若い頃のお母さんは、自分がそんな危ないものさしを持っているなんて気づきもしませんでした。

だから、自分勝手な偏見と色めがねで曇ったお母さんの価値観（ものさし）では、どんなに頑張っても、素行ちゃんは決してよい子の規格には入らなかったし、由紀乃ちゃんに至っては、人間としての価値など、一つも認められない存在でしかなかったのです。でも二人は間違いなくお母さんの生んだ子供達、この世で最も愛しく大切な子供達だったのです。絶望に打ちひしがれ、この子らを殺して自分も死ぬ以外に道はないとまで思いつめていたお母さんに『そのまんまが、尊いんだよ』と教えて下さった方があります。

『お母さん、由紀乃ちゃんはきれいだね、お家のみんなの宝物だものね』素行兄ちゃんこの一言でした。

幼い生命が二つ、お互いをお互いに宝物と拝みあっている尊い姿なのでした。

お母さんは足元にも及ばない、この穢れのない愛、いのちに対する共感がどこから来るのか、それはまぎれもなく仏さまの世界、浄土のものでした。

その時の素行ちゃんと由紀乃ちゃんこそ、真実を伝えるために、無量寿の彼方よりお母さんの子供として生まれてくださった仏さまだったのです。

本書で平野さんは人間の持っている価値観を「ものさし」と仰っていますが、まさに「彼女のものさし」の価値転換が起ったのです。

これを「回心」というのです。

こうして回心を遂げた平野さんは、由紀乃ちゃんに対して次のように語りかけます。

気づいてみれば、由紀乃ちゃんの人生は、何と満ち足りた安らぎに溢れていることでしょう。食べることも、歩くことも、何一つ自分では出来ない身体をそのままに、絶対他力の掌中に抱き込まれ、一点の疑いもなくまかせきっている姿は、美しくまぶしいばかりでした。

抱き上げればニッコリ笑うあなたは、自分をこのような身体に生み落とした母親に対する恨みもせず、高熱と発作を繰り返す日々の中で、ただ一身に病気を背負い、今をけなげに生き続けているのでした。

由紀乃ちゃん、お母さんがあなたに対して残せる、たった一つの言葉があるとすれば、それは『ありがとう』の一言でしかありません。なぜなら、お母さんの四十年の人生が真に豊かで幸福な人生だったと言い切れるのは、まったく由紀乃ちゃんのおかげだからです。

そうです。あらゆる「いのち」は、代わるべきものなき、たった一つの尊い「いのち」として、みな平等に光り輝きながらこの世に誕生するのです。ところが、私たちは、自分の勝手なものさしで、人を善悪、貴賤、優劣等々と分け隔てするため、ありのままが見えなくなっているのです。

さらに彼女は、子供たちに語りかけます。

素行ちゃん、素浄ちゃん（三番目の子）、どうか忘れないで下さい。自分も、このものさしを持った人間であるということ。

いつでも、どんなときでも、自分は、ものさしを使ってものを考え、他を判断し、行動しているのです。どうあがいても、このものさしから一步も出ることの出来ない私たちなのです。

ただ、ありがたいことに、ものさしを持つ自分の姿を確かに知ることが出来た時、人は同時に、ものさしのない世界を知り、その世界に触れることが出来るのです。

浄土真宗では、このものさしのいらぬ世界を、阿弥陀の世界、浄土と申しております。人は自分のものさし（価値観）を決して捨てることは出来ないけれども、浄土に触れることにおいて、ものさしを武器として、他を傷つけずにおれない自分の存在を悲しみ、その愚かさに気づかされることにより、まわりに対して、『ごめんなさい』、『ありがとう』と、言わずにはおれない人の心を取り戻すことが出来るのです。

思えば、私たち人間は、さまざまな経験や知識を通して生きる智恵というものを身につけてきました。そうして、その智恵が備わることによって、良いとか悪いとか、損だ得だという、自分なりの「ものさし（価値観）」を確立してきたのです。

その「ものさし」は、社会生活を営むために、なくてはならないものです。だから私たち人間は、それを捨てることは出来ません。

ただ、ここで大事なことは、そういうものさしを持たずにはおれない、そうして持つことによって人を傷つけずにはおれない、そうした人間の愚かさに気づいていくということです。それに気づかせてくれるものこそ、「ものさしのいらぬ世界（阿彌陀の世界、浄土）」なのです。

その世界に触れる時、私たちは初めて心の目を開くことができるのです。そうして、まわりの人々に対して、「ごめんなさい」、「ありがとう」と言わずにはおれない人の心を取り戻すことができます。

平成18年6月 「光明寺だより46号」より